

No. 93

すくらむ

2020.3.2 発行



福井県特別支援教育センターは、県立病院関連四機関の4階にあります。

P.1

巻頭言 「ほっこりした話」

P2

- ・2019年度の研修講座から、一部を紹介します
- ・研修講座について
～今年度のまとめと次年度に向けて～

P3

- ・家庭と教育と福祉の連携を推進する
「トライアングルプロジェクト」
- ・教育支援専門員派遣事業を振り返って

P4

- ・アセスメント・指導・支援パッケージ
(増補版)の発行について
- ・実践研究発表会の報告

巻頭言 「ほっこりした話」

福井県特別支援教育研究連盟 会長 窪田 光世 氏

3学期が始まって間もなく、ある自情学級の担任の先生から、こんなお話を伺いました。

帰り支度をしていた6年生と下級生2人の男の子たちの会話です。
「もうすぐ卒業式やなあ」「寂しくなるなあ。電話番号教えてや」「うん。もちろん。でも大丈夫や。また遊びに来るから。」そしてその3人は、しばらくの時間を黙ってしんみりと過ごしたそうです。

卒業間近の仲間と別れを惜しむ微笑ましい姿ですが、この3人がこんなふうに、しっとりとした時間を共有することなど普段は考えられないのだそうです。自分の思いを言葉にして伝えるのがとても苦手で、人と適切な距離をとることも難しく、みんなで何かをしようとしても、常にトラブル、かんしゃく、泣き顔、そして「ごめんなさい」……。困ったことが起きないようにいろいろな手立てを考え、ことある度にいろいろな言葉をかけ続け、そんな子どもたちの日々の中で、こんなに心穏やかな時間をみんなでいっしょに持てたことが、そして知らぬ間に子どもたちの心が成長していたことが、とても嬉しかったと言われました。

特別支援教育に限らず人を育てていくという私たちの日々の取組は、すぐに成果が見られないことも多く、できたと喜んだのも束の間、その直後には元の木阿弥ということもよくあることです。でも、たくさんの人たちとののかかわりの中で子どもたちは学び、ゆっくりゆっくり前に進んでいるのでしょう。子どもどうし、教員や支援者、家庭や地域、その他いろいろな所での人（や物、出来事）とののかかわりの一つ一つが積み重なって、着実に子どもたちは成長しています。子どもたちの力が伸びてきていることをときどき立ち止まって確認し、子どもたちと一緒に実感し、喜び合いたいものです。

そろそろ年度末。いろいろな振り返りをする中で、どんなにこの子たちが成長したか、あのときこんなことができた、あんなことがあったと、小さな、でもほっこり嬉しいできごとがいくつも思い出されるのではないのでしょうか。それがまた、私たち自身の明日へのエネルギーにもなりましょう。



2019年度の研修講座から、一部を紹介します



令和元年7月31日 「通常学級における算数につまずきのある子への支援」

一子どもたちの「困った！」に応じた具体的な応援方法を考えよう

福岡県飯塚小学校 通級指導教室担当 杉本陽子先生より、「**計算が苦手**」など、**数につまずきのある子どもの背景に応じた指導方法や支援教具**についてご講義・演習をいただきました。通級指導教室の環境設定や教材を作成するに至った子どもたちとのエピソード満載の講義で、学年ごとにつまずきやすい内容について教材紹介をしていただき、実際に教材を使っの演習も行いました。以下に、講義内容のポイントと教材を紹介します。



・今、子どもの見える姿だけで責めない。どこに原因があるのか、探っていくことが大事。学級のみんなの前で叱られるのは、子どもがいちばん傷つく。

・話が聞けない子は、周りを見るように伝える。気がかりな子は、最前列ではなく、2列目で、モデルになる子の隣の席にする。モデルになる子は見本を見せてくれる子を指名する。

・教材のアイディアが生まれるのは子どもといるときで、授業中に使ってみて、うまくいきそうだったら、きちんと作る。バージョンアップするときは、大人でなく、子どもの意見を取り入れる。

教材紹介

「たしひきものさし」で、筆算の手順を確実に身につけよう

杉本先生の教材は、特別支援教育センターでも、いくつか実物を見ることがができます。また、「学研 学校教材ネット」から購入することもできます。

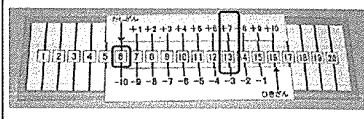
「長さ」の単位 考え方ノート



例えば

$$6+7=13$$

- ① ↓に6を合わせる
- ② +7のところを見る
- ③ 答えは 13



・学習についていくのが難しい子は課題の量を減らす。休み時間まで、できない課題や直しをさせるのは、ソーシャルスキルを身につける時間を奪ってしまうことになる。

実際に演習で使ってみました！

NEWS! 次年度も杉本先生の講座を開催予定！今年度受講できなかった方は、ぜひ申し込んでください。

子どもの姿から、教材として使う物、使い方、大きさ、時間を変えていく。教材の良し悪しは子どもから学ぶという先生の言葉に、とても共感しました。



アンケートより

ほんの少しのアイディアと工夫で、「分かった!」「楽しい!」「なるほど!」が得られることが得られることが分かり、授業に悩んでいる自分の困り感を解消できました。

研修講座について～今年度のまとめと次年度に向けて～

今年度は16の研修講座を開催し、のべ1,763名の方が受講されました。会場変更による当日の混乱をなくするため定員を設定しましたが、前述の杉本先生の講座のように申込開始から10日ほどで定員に達してしまう講座が出てくるなど、現場の先生方の「読み書きや算数など、学習の苦手さへの支援」に関する高い関心とニーズが浮き彫りになりました。「読み書きの苦手さへの支援と配慮」については、当センターでも重点的に取り組んでいるところです。次年度も杉本先生をはじめ、ディスレクシアの当事者の話やアセスメント、合理的配慮について学ぶ講座を開催する予定です。また、平成30年度から始まった高校通級も2年目を迎えましたが、福井県は先見の取組を行っています。通級を実施している高校の特別支援教育コーディネーターと高校通級指導教員双方からの実践報告も、次年度のおすすめ講座として開催予定です。さらに、今年度は「思春期・青年期の支援」として『発達障害とゲーム・ネット・スマホ依存』についての講座を実施しましたが、開催日が6月で授業日だったにもかかわらず、会場定員を超える申込がありました。いまやSNSやゲーム依存は学校現場だけでなく、社会全体の大きな問題の一つです。思春期・青年期の特徴をふまえながら、依存からの不登校やひきこもりにどう対処していくかについての講座も開催予定です。

家庭と教育と福祉の連携を推進する「トライアングル」プロジェクト

平成30年3月に家庭と教育と福祉の連携を推進する「トライアングル」プロジェクト報告がまとめられました。

これは、支援が必要な子どもやその保護者が、乳幼児期から学齢期、社会参加に至るまで、地域で切り目なく支援が受けられることを目指すものです。特に教育と福祉の連携については、学校と児童発達支援事業所、放課後デイサービス事業所などの障がい児通所支援事業所等との相互理解と促進や保護者も含めた情報共有の必要性が指摘されています。行政分野を越えた切れ目ない連携が不可欠として、文部科学省と厚生労働省両省によって進められたプロジェクトです。

特に「教育と福祉との連携」については以下の内容が取り上げられています。

- ・教育委員会と福祉部局、学校と障がい児通所支援事業所との関係構築の「場」の設定
- ・学校の教職員への障がいのある子どもに係る福祉制度の周知
- ・学校と障がい児通所支援事業所等との連携の強化
- ・個別の支援計画の活用促進



令和元年度は、国立特別支援教育総合研究所（発達障害教育推進センター）と国立障害者リハビリテーションセンター（発達障害情報・支援センター）が連携して保護者等が活用しやすいWebページの公開や、教育や福祉分野において発達障がい者の支援にあたる人材が身につけるべき専門性を整理し、その研修の在り方などを検討しています。当センターでは、福祉にかかわる研修講座を2年に1回開催しております。一緒に学びましょう。

教育支援専門員派遣事業を振り返って

本県の小中学校の特別支援教育がより充実することをめざし、県は3名の教育支援専門員を置き、県内全ての公立小中学校を訪問する学校支援事業を行ってきました。この事業は平成29年度からの3年計画で始まり、1年目の平成29年度は福井市、永平寺町、2年目の平成30年度は大野市、勝山市、あわら市、坂井市、鯖江市、越前町、池田町、3年目の令和元年度は南越前町、越前市、敦賀市、小浜市、美浜町、高浜町、おおい町、若狹町を対象として事業を進めてきました。

教育支援専門員の学校訪問では、管理職や特別支援教育コーディネーター（以下、特コ）から学校経営に係ることや自校の特別支援教育に関する状況をお聞きし、授業参観での個々の児童生徒の様子も参考にしながら、各学校の状況に応じた特別支援教育の推進についての協議や相談を主な業務としました。

この3年間の学校訪問での気づきを当センター研究紀要にまとめました。以下はそのタイトルです。

- 個別の指導計画の作成状況が大きく変容してきました。なんのために個別の指導計画を作成するのでしょうか。
- 個別の指導計画の文章表現は適切でしょうか。複数の目でご確認ください。
- 校長面談で多様なお話をいただき、児童生徒や教職員への声かけの大切さを知りました。
- 授業者と児童生徒の授業中の音量はどうですか。授業に参加できない児童生徒の存在も気になります。
- 特コ面談は貴重な機会となりました。多くの学校に参考にさせていただけるよい事例があります。
- 支援状況調査を見直しましょう。支援状況一覧表には自校の特別支援教育の現状が凝縮されています。
- 通級による指導が大きな成果を生んでいます。そのニーズも年々高まっています。
- 保幼小中高の校種間における移行支援だけでなく、同一学校の学年間の引継ぎも重要です。



*よろしければ、令和2年3月刊行の当センター「令和元年度研究紀要第37号」をお読みください。

「読み」や「書き」に困難さがある児童生徒に対する アセスメント・指導・支援パッケージ(増補版)の発行について

当センターは、平成30年7月に、「『読み』や『書き』に困難さがある児童生徒に対するアセスメント・指導・支援パッケージ(第1版)」を発行し、県内のすべての学校や関係機関に配付しました。また、当センターのWebサイトで公開しましたpdf版は、公開からの1年半で4,800件のダウンロードをいただき、県内外でご活用いただいております。

第1版の公開後、1年半が経過し、その間にいくつか新しい教材が公開されました。また、県内の学校における実践事例も増えてきています。そこで、追加の情報を「増補版」としてまとめ、3月に当センターのWebサイトでpdfファイルを公開いたします。第1版に掲載されている情報と合わせて、読みや書きに困難さがある児童生徒の指導にご活用ください。



実践研究発表会 報告

令和2年2月5日(水)当センターにおいて、実践研究発表会が開催されました。授業づくり、個別の指導(支援)計画を活用した教育実践、生徒への適切な合理的配慮の決定に向けた取組、高等学校における校内支援体制の構築、高校通級の活用といった実践報告がなされました。今年度は、様々な視点からの実践報告であったことから、園、学校、関係機関など、多様な立場の方のご参加をいただきました。

参加者 からの声



【惜陰小学校の実践から】

「特コとして、関わる人をつなぎ、学校全体を巻き込んで、授業研究会の在り方や指導案の様式について提案をしているところが素晴らしいと感じた」

【河野小学校の実践から】

「子どもの成長に真剣に向き合い、努力していることが感じられた」「子どもに寄り添い、保護者の思いを大切にしていることがとても伝わってくる内容だった」

【成和中学校の実践から】

「本人が自分にとって良いと思えることが大事、との言葉が胸に響いた」「特コとして通常学級の先生や校内全体に働き掛ける取組に刺激を受けた」

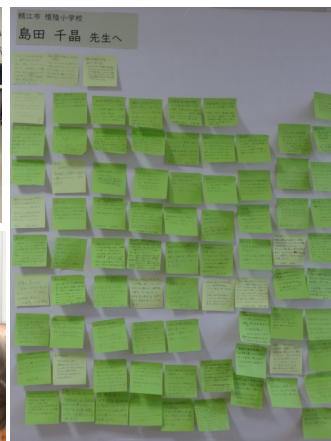
【奥越明成高等学校の実践から】

「校内の教員に理解を促すために、校内研修を行うことは大切だと思うが、それを単発で終わらせるのではなく、継続して行うことの有効さや重要性を感じた」

【福井東特別支援学校・丸岡高等学校の実践から】

「高校通級を支援学校の先生が担い、実践が進んでいることを知り、感銘を受けた」「高校通級の具体的な指導法や効果について聞くことができ、勉強になった」

当日は、午前・午後それぞれの実践発表の後に、参加者3～4名の様々な立場の方同士で、発表の感想や授業づくり、合理的配慮、外部機関との連携等について情報・意見交換を行いました。また、参加者の感想や意見を付箋紙に書き、模造紙に貼っていききました。最後に、福井大学連合教職大学院の新井豊吉氏、荒木良子氏、笹原未来氏、小嵐恵子氏からご講評をいただきました。



センターだより すくらむ 第93号

発行日 令和2年3月2日
発行所 福井県特別支援教育センター
所在地 〒910-0846 福井市四ツ井2丁目8-1
TEL (0776) 53-6574 FAX (0776) 52-6272
E-mail tokuse@pref.fukui.lg.jp
URL <http://www.fukuisec.ed.jp>

